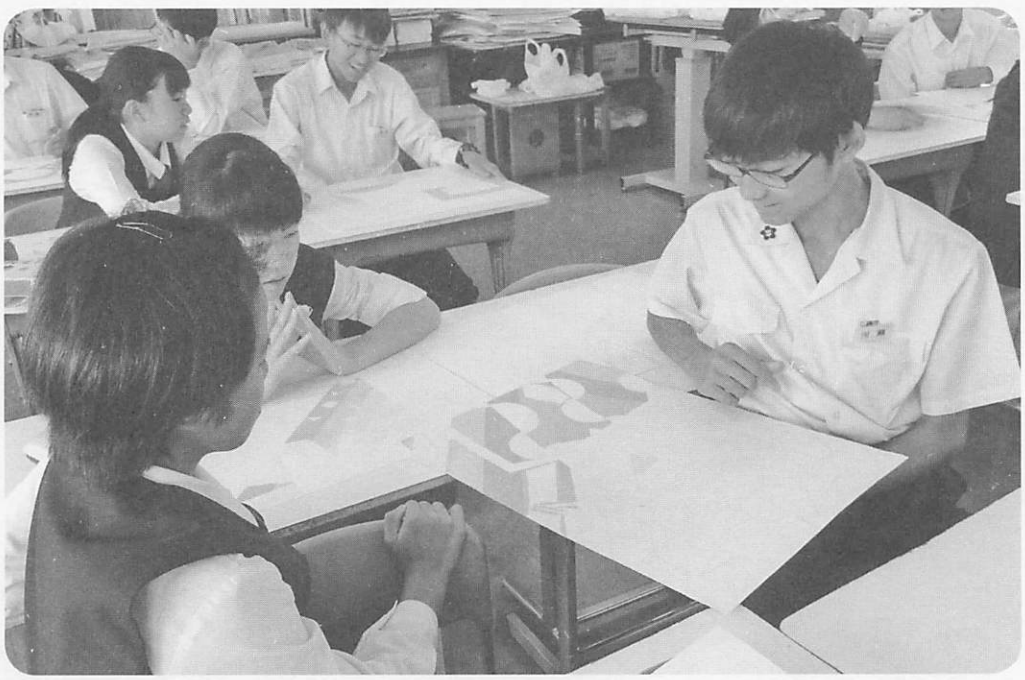
美術科

教科領域研究テーマ

【感性を豊かにし，心豊かな生活を創造していく力の育成
— 生活を美しく豊かにする美術の働きについての
理解を深める対話的な学習の展開 — 】



美術科

感性を豊かにし，心豊かな生活を創造していく力の育成

－ 生活を美しく豊かにする美術の働きについての理解を深める対話的な学習の展開 －

実　践　者　野口　理佳
愛媛大学研究パートナー　秋山　敏行，福井　一真

第１章　はじめに

研究テーマ設定の理由

美術科では，表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，造形的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標としている。また，グローバル化や情報化の進展などにより価値観が多様化している中，生徒が他者とのコミュニケーションを図りながら主体的・協働的に造形的な見方・考え方を働かせ，生活の中で美術がどのような働きをし，社会に関わっているのかを理解する学習が重視されている。このような学習を通して，これからの社会を生きる生徒たちに豊かな人間性や創造性を育み，心豊かに生活しようとする態度を身に付けさせることは，自立した人間として，他者と協働しながら，新たな価値を創造する力の育成に寄与するものであり，これは「持続可能な社会」を支える資質・能力の育成につながるものと考える。

昨年度から，表現における発想･構想の過程や鑑賞活動の中で対話的な学びを取り入れながら，生活における美術の働きについて考え，身近なものに対する見方や感じ方を広げる授業を工夫してきた。今年度は，デザイン分野における発想・構想の過程に焦点を当て，対話的な学びを取り入れながら，生活を美しく豊かにする美術の働きについての理解を深めさせたいと考え，本研究テーマを設定した。

第２章　研究の実際

１　研究の内容及び方法

(1)　事前アンケートによる生徒の実態把握

(2)　生活と美術を結びつけ，論理的・創造的思考を促す学習活動の工夫

生徒は，多くの日用品を使用しながら生活しており，学校や家庭等で使用する場面により使い分けている。今回の題材では，４月から使用してきた通学鞄のデザインを分析し，学校生活に合った美しさと機能性があることに気付かせた。そして，自分たち附属中生にとって心地よい鞄にするための工夫点を考えさせ，使用目的に合った基本となる美しさや機能性に付加されたオリジナリティの大切さにも気付かせ，多様なデザインの中から自分に合った物を選択することで個々の生活を豊かなものにすることを理解させた。また，小集団による話合いや根拠を持って説明する場面，デザイン画に説明文を加筆する場面を設定し，思考した内容をデザイン画のみで表現するのではなく，言葉や文章で表現させることで，論理的・創造的思考を身に付けさせた。

２　研究の実際

(1)　題材名　デザイン「暮らしの中の美と用について考えよう」

(2)　「逆向き設計テンプレート」による指導計画

第１段階：求められている結果

【研究テーマを踏まえた目標】

○暮らしの中のデザインを観察し，他者との意見交換により見方を広げ，美しさと機能性の大切さを理解することができる。

○使用する目的に合った通学鞄の条件を踏まえて，自分たちにとって心地良いものにするための工夫点を考え，デザインレポートを作成することができる。

【本質的な問い】

生活を美しく豊かにするデザインとはどのようなものか。

【永続的な理解】

生活を美しく豊かにするデザインとは，使用する目的や使用環境に合った美しさと機能性を兼ね備えたデザインである。また，使用する目的に合ったデザインの条件に加えて，色や形などが使用者の好みに合ったものであることも大切である。

【生徒は次のことができるようになる】

○自分にとって心地良いものについて，自分の価値意識や根拠を持って説明することができる。

○通学鞄のデザインについて，美しさや機能性の観点で意見交換を行いながら分析し説明することができる。

○学校生活に合った美しさや機能性を踏まえて，自分に合った通学鞄のデザインを工夫することができる。

○デザイン画を，色えんぴつや定規等の用具を用いて丁寧に仕上げることができる。

【題材目標に必要な「論理的に思考し表現する力」】

○鑑賞活動や資料観察において、多様な価値観に触れながら見方を広げるとともに、自分なりの価値意識を持って分析し、根拠を持って説明することができる。

○表現活動において、基礎的な知識や技能を基に構想を練り、課題を解決しながら主題に迫ることが出来る。

第２段階：評価のための証拠

【パフォーマンス課題】

「私たちがデザインする通学鞄」～附属中生にとってよりよい通学鞄をデザインしよう～

附属中学校の通学鞄のデザインを一新するために，在校生からアイディアを募集します。現在の通学鞄の良さを参考にしながら，附属中生にとってよりよい鞄になるようにデザインを考えなさい。

【パフォーマンス課題における評価規準】

○通学鞄のデザインについて，主体的に分析し説明することができる。

○通学鞄のデザインについて，意見交換を行いながら美しさや機能性の観点で分析し説明することができる。

○学校生活に合った美しさや機能性を踏まえて，自分に合った通学鞄のデザインを工夫することができる。

○デザイン画を色えんぴつや定規等の用具を用いて丁寧に仕上げることができる。

【他の根拠】

○「自分にとって心地良いもの」レポート（発表の様子含）

○通学鞄分析ワークシート

○通学鞄デザイン画紹介の様子

第３段階：学習計画（全５時間）

①「自分にとって心地良いもの」（冬休み課題レポート）の紹介	１時間
② パフォーマンス課題	３時間
③「附属中生にとってよりよい通学鞄」の紹介	１時間

⑶ 指導の実際（3/５時間）

① 主　題　「私たちがデザインする通学鞄」

② ねらい

通学鞄のデザインを観察し，その良さや改善点を分析することで，使用する目的に合ったデザインの美しさや機能性の大切さについて理解することができる。

③ 展　開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ・生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　パフォーマンス課題を知る。（一斉）	3	【課題】「私たちがデザインする通学鞄」 附属中生にとってよりよい通学鞄をデザインしよう 【本時の課題】通学鞄の良さや改善点を分析しよう	
2　多様な形の鞄やバッグを観察する。（一斉）	10	○肩掛け鞄やランドセル，登山用リュック等の多様なデザインの鞄を観察しよう。	○多様なデザインの鞄を紹介することで，鞄への興味を持たせた。
3　中学校の通学鞄を分析し，グループで意見交換を行い，内容をまとめる。（個人）→（小集団）	27	○肩掛け鞄やランドセルと比較し，中学校の通学鞄の美しさや機能性について分析しよう。 ○グループで通学鞄の分析内容とその根拠について話し合い，意見をまとめよう。 ・形の工夫（２ｗａｙ・中学生の体型に合っている・ポケット・用具が入りやすい・肩部分にクッション・縁取りがあり丈夫・教科書が傷みにくい・シンプル） ・色の工夫（落ち着いた配色・学習の場にふさわしい・附属マーク付・濃い色のため汚れても目立たない） ・材質の工夫（防水加工・柔らかい・軽い） ・安全面の工夫（金属の使い方・反射テープ）	○肩掛け鞄やランドセル等，他のデザインと比較させることで，使用環境や目的，使用者の年齢に合ったデザインかどうかを考えさせた。 ○ワークシートに根拠を記入させることで，自分の意見を明確にさせた。 ○形・色・材質・安全性の観点でまとめながら通学鞄の美しさと機能性を確認することで，理解を深めさせた。 ○形や色，材質の工夫点や改善点を実体験に基づく根拠を持って説明させることで，論理的に思考し表現する学び合いをさせた。
4　グループでまとめた意見を発表する。（全体）	7	○グループでまとめた意見を発表しよう。 	○根拠を明確にさせるために，不明な点は質問をさせた。 ◇通学鞄のデザインについて，使用する目的に合った美しさや機能性の観点で分析し理解することができる。（ワークシート）
5　本時の内容を振り返り，次時の学習内容を確認する。（一斉）	3	○次時は，附属中生にとって心地良い通学鞄のデザインを考えよう。	○次時の学習内容を確認させ，デザイン画制作に必要な資料の収集を課題とした。

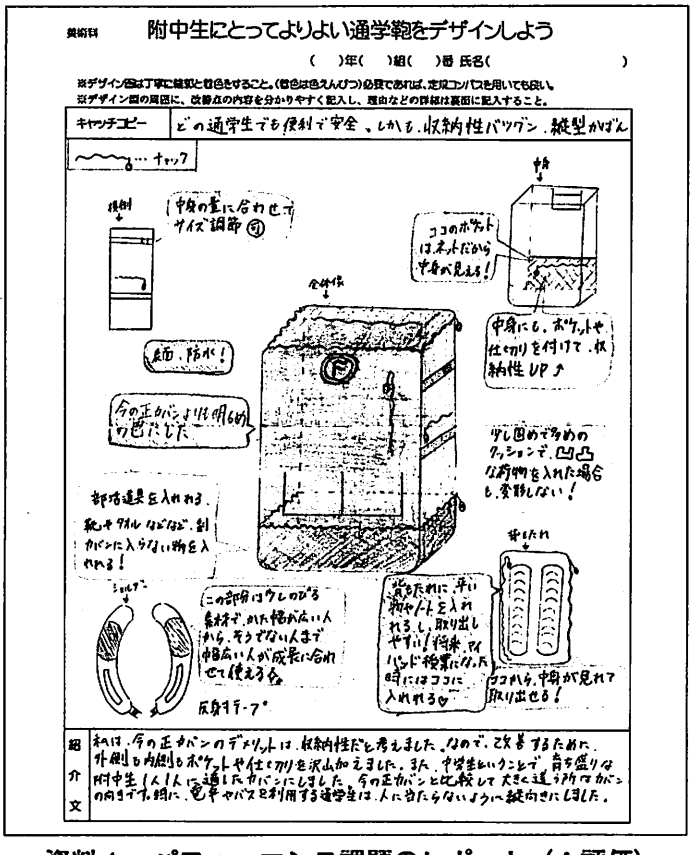
(4) 生徒の学びの実際

パフォーマンス課題で作成した生徒のルーブリックによる評価内容（**表１**）や通学鞄デザインレポート（**資料１**），生徒の美術科学習内容と生活との関連性についての記述（**次頁資料２**）は以下の通りであった。

ルーブリックを基にしたパフォーマンス課題の評価では，Ａ評価が30.2%，Ｂ評価が54%，Ｃ評価が15.8%であった。内容を分析すると，Ｂ評価のデザインでは，機能性についての改善点が中心になっているものが多く，色や形の美しさに目を向けさせる工夫や声掛けが必要であったと感じた。また，改善点の内容が，実際に使用するとなると利便性に欠けているものもあり，より具体的にイメージしながら思考することの大切さを押さえるべきであった。Ｃ評価の生徒の中には，デザイン画を描く技能面だけでなく，改善点を見出そうとする意欲や関心が低い生徒もいた。その中には現在の鞄に満足している生徒もおり，よりよいものを開発しようとする姿勢が現在使用している様々な商品を生み出していることに気付かせることが，生徒の意欲や思考力向上につながるのではないかと考える。

表１　パフォーマンス課題（通学鞄デザインレポート）のルーブリック

評価	A	B	C
発想・構想	学校生活に合った美しさや機能性を踏まえて，附属中生のイメージに合った通学鞄のデザインを，収集した資料を活用しながら５つ以上工夫することができる。	学校生活に合った美しさや機能性を踏まえて，自分の生活や好みに合った通学鞄のデザインを工夫することができる。	学校生活に合った美しさや機能性を踏まえて，自分の生活や好みに合った通学鞄のデザインを工夫することができない。
創造的な技能	デザイン画を，色えんぴつや定規等の使い方を制作意図に合わせて工夫しながら，丁寧に仕上げることができる。	デザイン画を，色えんぴつや定規等を用いて，丁寧に仕上げることができる。	デザイン画を，色えんぴつや定規等を用いて，丁寧に仕上げることができない。



資料１　パフォーマンス課題のレポート（Ａ評価）

（質問）美術科の学習内容が生活や社会と関係があると感じた理由
○伝えるときに，全て文章で表すわけではなく，絵で表す事もあると思うから。 ○いろいろな色や形等を見て，様々な事を考え，感じることで，好奇心旺盛なものの見方や感じ方などを身に付けることができるから。 ○色や形で，リラックスしたり，楽しめたりすることができるため，生活をより楽しく過ごすために美術は必要だから。 ○日常の中で使われる様々なものにデザインや配色などの工夫がされていて，生活を豊かにするための一つの支えになっていると思うから。

資料２　美術科学習内容と生活との関連性についての記述

３　成果と課題

(1)　事前アンケートによる生徒の実態把握

事前アンケートでは，美術科の学習内容と生活や社会との関連性について，「少しはある」「全くない」「分からない」と答えた生徒が42％おり，生活の中にある美術的な要素を認識していない生徒が多かった。また，デザインという言葉から連想する事物については，「ポスター」「レタリング」「色」等，以前の学習内容から連想する傾向があり，自分たちの生活がデザインされているもので成り立っていることに気付かせる必要性を感じた。

(2)　生活と美術を結びつけ，論理的・創造的思考を促す学習活動の工夫

本題材は，「暮らしの中のデザインから使用する目的や環境に合った美しさや機能性を発見し，その大切さを理解するとともに，自分たちにとって心地良いものにするための工夫点をさらに考える。」ということを主なねらいとしている。１時間目の授業では「自分にとって心地良いもの」を紹介し合い，心地良く感じる根拠を明確にすることで，身の回りにある愛着のあるものは美しさや機能性を備えているものが多く，それが生活を心豊かにしていることに気付かせることができた。そして，本時の授業から，生活の中にある美術的要素について考えさせるために，デザイナーが依頼主に提案する企画書作成の要領でパフォーマンス課題を設定した。学校生活にふさわしい鞄のデザインは，個人の好みで自由に考えようとするのではなく，個人から集団へと目を向けながら快適に使用できるデザインを追求する場となった。そのため，他者との意見交換の必要性を実感しながら，根拠を明確にする話し合いやデザイン画レポートの作成を行うことは，論理的思考力の向上につながったのではないかと考える。特に，普段使用している通学鞄のデザインを小集団で分析する場面においては，ランドセルや肩掛け鞄，登山用リュック等，他種類の鞄やリュックと比較させることで，学校生活や発達段階に合わせたデザインの工夫点にも気付くことができ，興味を持って取り組むことができた。しかし，生徒のデザインレポートを見ると，多くの改善点を考えてはいるが，全体的に改善内容が類似しているものが多く，発想の広がりという点では課題が残った。通学鞄の使用者を，自分たち以外にも，10年後，20年後の後輩たちにする等，課題の条件に幅を持たせる工夫が必要であったと感じた。今後は，逆向き設計による指導計画やパフォーマンス課題のルーブリックを作成する段階で，生徒の思考や表現の流れを明確にしながらよりよい課題設定となるよう工夫していきたい。

第3章　おわりに

この３年間，「持続可能な社会を支える資質・能力の育成」を研究の柱にし，論理的に思考し表現する学び合いを各教科で実践してきた。美術科でも，コミュニケーション活動を効果的に設定しながら，心豊かな生活を創造していくために美術が欠かせないものであることを理解させるために，鑑賞分野やデザイン分野に焦点を当てて研究を進めてきた。他者の見方や考え方が自己の発想や構想に広がりを与え，豊かな表現を生み出す経験は，生徒の論理的思考力の向上はもちろん，他者の意見や表現方法から積極的に学ぼうとする主体性の向上にもつながった。また，アンケート結果でも，振り返りの場面で，主題や制作の構想，表現の工夫を他者に自信を持って伝えている生徒や，制作過程において意見交換が重要だと感じている生徒が多く，対話的な学びの重要性を実感した。美術科の学習内容と生活との関連性を理解している生徒も大幅に増加している。

今後は，生涯にわたり主体的に美術に関わろうとする生徒を育成するためにも，生活の中の美術の働きに加え，美術文化への関心が高まる教材の開発や授業展開の工夫，対話的な学びの研究を進めていきたい。

参考文献

西岡加名恵（2008）「『逆向き設計』で確かな学力を保証する」明治図書
西岡加名恵（2016）「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価　アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」明治図書
永関和雄・安藤聖子（2018）「平成29年改訂中学校教育課程実践講座　美術」株式会社ぎょうせい